

青嶺 Seirei

文責 田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

「もう半分?」「まだ半分?」
難しい6月を過ごす皆さんへ

新年度が始まって3か月弱が過ぎ、大きな行事も終え、新しい生活も軌道に乗ったところでしょうか。

友人たちを「知る」こと、自分を「知ってもらう」ことを積み重ねていることでしょうか。生活全般で「望ましい関係」を構築している最中ではないでしょうか?

そんな毎日ですが、6月はまだか宙ぶらりんのか一か月で、気持ちの持って行き方が難しく感じられませんか?今の時期は年度初めの新鮮さが薄れていくと同時に、悪い意味での慣れも出てきます。

学校や周囲の人たちの良い点は「当たり前」で目立たなくなり、そうではない点ばかりが余計に目について、つい不満や文句が出てしまいがちになります。

そんな時には、いったん立ち止まって、「今の不満が本当にそうなのか?」「自分の気持ちの持ち方になぞ原因があるのではないか?」

ということをしつくり考えてみてください。

見方一つで良くみえたり、逆に悪くみえますが、人生を幸せに生きるコツとしてはやはり前向きな見方考え方をすることだと私は思います。コップに半分のジュースを見てあなたはどちらの考えをしますか?



「走る」ことは「人」を走らせるのか?

私が陸上競技の選手だった話は以前したと思いますが、人に合わせるのが苦手だった私は、はっきりと公正に結果が出て、自分一人で頑張ることが出来る陸上競技を部活動で選びました。

自分の努力が自分だけに跳ね返ってきて、勝負がはっきりつくというシンプルさが私にはよく合っていました。チームで練習はしますが、自分自身の心と戦いながらタイムを縮めるために毎日練習に励みました。

大学生の時、他の運動部の先輩と話していたとき、「陸上は自分が頑張る力を伸ばすもの。僕は誰の力も借りていません」と言っていた私に対し、その先輩が静かにこう返しました。「田中、スタートのピストルは誰が鳴らす?一緒に走る人がいなくても練習できるか?周囲の人がいて陸上競技も成り立つはずやろう。感謝の気持ちをお忘れたらいかん。お前の考えは傲慢や」と。

選手としては当時絶頂期でそれなりに速くなり、チームではナンバーワンだったこともあって知らず知らずのうちに傲慢な考えになっていたのでしよう。いつの間にか自分のこと「だけ」を優先しすぎたうがった考えになっていた自分を、ピシッと戒めてくれた二つ上の先輩はすごく大人でした。

確かにその通りです。一人ではやれることはほんとうに限られているのでした。

周囲の手助けや環境が当たり前になって、マネージャー、チームメイトへの感謝の気持ちをお忘れしていました。言われた時はムツとしましたが、その後、私の競技に対する考え方や、取り組みは着実に変化していきました。陸上競技だけでなく、人生において大切なことに気づかせてくれたその方に、今でも深く感謝しています。

旅すること

何年かに一度、一人で旅をすることが私のライフワークとなりました。毎月少しずつお金を積み立て、行く場所を決め、下調べをして旅程を立て、自分で予約を済ませて旅立つワクワク感は言葉で表せません。

お金をためている最中から心はその場所へと向き、実際に行ったら五感全てが何かを吸収するためにフルに働きます。一人きりでずから見るもの、聞くもの、食べるもの、その地の出来事や人との出会いは、ハプニングやトラブルも含めてすべてが自分自身の血となり肉となります。

帰ってから旅した場所の自然や歴史等に興味が尽きず、書籍やインターネットなどで疑問点を調べ、それがまた次の旅へのきっかけとなることもよくありました。

自分の感性さえ研ぎ澄ませば期間や距離・場所は関係ありません。また想像力さえあれば、実際に出かけなくても「旅」はできるのです。

「知る」ことで知識や考え方を更新し、広い視野で物事を捉える力が養われます。人を知り土地を知り文化や考えを知る。こちらからも「知ってもらう」。互いの理解がすすめば、きっと住みよい世の中になると私は信じています。

皆さんの背中にも翼があります。風が吹いてきたとき、大きくその翼を広げ自由にはばたく日がきつとやってくるでしょう。それまで大いに学び、自分の胸の中で思いを温め、大事に育ててください。

校長室より

昼休みに図書室で何気なく読書をしていたら、一年生の生徒から話しかけられました。「なぜプールの後は疲れるのか?」という話題からいろいろ広がり楽しいひと時でした。最後に「校長先生、また話しましょう!」と。嬉しい一言です。